近代初期のイギリスにおける精神的不安に関する一考察

武　田　久　義

一．はじめに
二．宗教改革と共同体の解体
三．イギリスの宗教改革
四．精神的不安の解消
五．むすび

一．はじめに

本稿は，中世末期頃から近代初期にかけてのイギリス社会における精神的不安とその解消に関する一考察である。後述するように，当時のイギリス社会は他のヨーロッパの社会と同様，きわめて大きな変化の過程にあった。そして様々なリスクが存在していたが，それらのリスクには，大雑把にみて精神に関連するものと物質に関連するものがあった。本稿では，主に精神に関連するリスクを精神的不安と称し，それについての考察を行おうとするものである。イギリス社会を対象としたのは，中世における多くの本質的な問題点が不十分ながらも一応克服され，いちはやく近代社会が誕生したと筆者は考えているからである。

ところで，近代社会の基本的性格をどのようにとらえるか。かなり困難な問題ではあるが，筆者は，それを個人主義の生成と確立に関連してとらえる

キーワード：精神的不安，宗教改革，ピュリタン，共同体

ものである。したがって，中世末期頃に起こった共同体の解体は，きわめて重要な意味を持っている[1)]。共同体の解体は，それまで人々が経験しなかったような様々なリスクを発生させたり，また，それまでに存在していたリスクを大きく増大させることになった。そしてリスクへの対処は，結果として社会変動を生み出す一つの要因となったと思われる。

ところで，当時の精神的不安のうちで最大のものは魂の救済に関するものであった。それを一言で表現するならば，それは「永遠の救いを得るためにはどうすればよいか」ということであった。中世のキリスト教社会においては，教会を通して「救い」への道が開かれていた。しかし，宗教改革は，これを根本から覆すものであった。そしてカルヴィニズムは，救済についての不安をもつ人々にとって「救いの確証」を一つの具体的なかたちで提起した。それは，生活における禁欲的生き方と，職業労働における合理化であった。カルヴィニズムは，イギリスにおいては一般にピュリタンによって担われたが，ピュリタニズムはイギリス社会における精神的不安に対処する大きな力の一つとなったのである。

本稿では，最初に宗教改革と共同体の解体について大雑把に概観し（第二節），次にイギリス国教会の成立とピューリタニズムの普及を中心に，イギリスの宗教改革を述べる（第三節）。そして，ピューリタンがどのようにして精神的不安を解消していつたのかについて若干の考察を試みた後（第四節），今後の課題について簡単にふれておく。

なお，表記について，一言記しておこう。たとえばカルヴィンとカルヴァンとうように異なった表現方法があるものについては，カルヴィン，カルヴィニズム，ルター，ピュリタン，ピュリタニズムと，統一して使用することとする。

---

1) トレルチは，中世から近代への転換が，「国家教会的強制文化」から「近代的な教会の束縛をもたない個人主義的文化」への移行としてとらえる。（大木英夫，『ピューリタニズムの倫理思想』，1966年，新教出版社，15頁。）

二．宗教改革と共同体の解体

中世社会の特質を簡潔に，筆者は「共同体社会」という言葉で表現したい。そしてそれは，ヒエラルキーを基本とした秩序を維持する共同体社会であった。このような秩序を基本とした中世社会は，様々な変化のエネルギーを有しながらも基本的に変化することがなかったか，あるいは部分的な変化にとどまるものであった。したがって，中世社会を全体的に眺めた場合，それは精神面でも物質面でも静的な社会であったと評価することができると思われる。しかしながら，変化のエネルギーは少しずつ蓄積され，やがて大きな社会変動を引き起こすこととなる。

最大の精神的不安は，宗教改革およびそれに伴う精神上の変化としてあらわれる。16，17世紀のヨーロッパにおいては，人間，社会，宗教等様々な領域において深刻な問題が発生した。それは，中世から近代へという歴史的な転換期でもあった。たとえば，中世社会を大きな岩塊とすれば，個人はその岩に彫り込まれた浮彫のようなものであり，その背後は社会全体と結びついていた。そこには，ソリダリティがあった。しかしこの岩がこわれ，人間は浮彫ではなく，立像のように自立しなければならなくなった。この過程は人間にとっては危機であった。大木英夫氏は，次のように記している。「中世的キリスト教的文化体制を示す概念としての「corps Christianum」の崩壊を中世から近代への移行としてとらえる。(中略) これは，キリスト教的な社会理念であっただけではなく，巨大な歴史的現実であり，そしてその歴史的現実はただ単に教皇支配体制という政治体制であるだけでなく，形而上学的神学的基盤をもった歴史的現実であった。この体制においては，権威の所在は明確であり，秩序も確立されていた」[2]。このような，中世の人々にとって精神的基盤を形成していた共同体が解体したのである。宗教改革による中世体制の崩壊によって，16，17世紀の人間は深刻な問題状況に投げ込まれた。この

2) 大木英夫，前掲書，24-25頁。

ように，中世の末期は，不安の時代であった。中世末期における最大のリスクの一つである精神的不安は，このような背景を有していた。そこで，このような不安の原因となった宗教改革について簡単に説明しておこう。

中世の後期になると，商工業はかなり盛んになる。遠隔地との交易はもとより，最初から販売を目的として生産が行われるようになった。このため，とくに交易の中継地等においては様々な地域の文化の交流が行われることになった。文化が交流するところでは，一般に新たな文化が誕生する。ヨーロッパにおいては，それは通常，ルネサンスとして知られている。最初イタリアのフィレンツェを中心に起こったルネサンスは，基本的に中世的性格を有するものであった。しかし，ルネサンスが，人間に目覚め，個人と自由を探求しようとするものを有していた点において，それが近代の先駆けとなったことは，否定できない。ルネサンスは，西欧全体にひろがって行く過程でその様相を変えた。これをきわめて大雑把に表現するならば，南欧では豊かな芸術となって花開いたのに対して，北欧では現実の生活の規制を含めて生き方をも変える宗教改革となってあらわれたことである[3)]。

一方，14世紀頃から，政治的な意味での封建制度が次第に弱体化し，各地域に領域的・集権的な統一国家体制が築き上げられるに伴い，もともと封建的な権力分散状況でのみその普遍性と絶対性を保証されていた教皇権は，不可避的に動揺した[4)]。そして1517年にマルティン・ルターが宗教改革のために立ち上がった時，それは当時のカトリック教会を大きく揺り動かすこととなった。ルターが，カトリック教会に対して「義認」という根本的な問題を提起したからである。「義認」を一言で表現するならば，人は信仰によって義とされるということである[4)]。そして，聖書にのみ従うことが強調された。それは，それまでのカトリック教会による儀式や形式を中心にしたものからの大きな転換であった。

---

3) 谷口睦夫，『アメリカの若者たち』，1961年，岩波書店，110-111頁。

4) 「信仰義認論」または「福音主義」と呼ばれた。それは，「ひとの救いは，行いによるものではなく，十字架のキリストにおける罪の贖いを信ずることのみによる」という確信を根底に有している。(『世界大百科事典』1988年，平凡社より。)

ところで，前述したように，当時の人々の行動を規定する最も重要なものの一つとして，「救い」の問題があった。すなわち，どのように生きれば救われるのか，そして永遠の生命を得ることができるのかということである。中世のカトリック支配のもとでは，ローマ教会の指導における「許し」が「救い」に至るみちであった。しかし，宗教改革を通じて一般の人々のレベルにおいては，この「救い」のあり方に決定的な転換が生じたのである。すなわち中世のカトリック教会のもとにあっては，僧侶になったり修道院に入ることが神に仕えることと考えられていた。これに対してルターの「信仰義認論」は，世俗における職業労働もまた「救い」にいたるみちであるとしたのである。つまり，神に喜ばれることは「職業」に忠実に取り組むことであるとされたのである。宗教倫理におけるきわめて重大な転換が行われたと言えよう。そして，ルターの唱えたこのような「職業」観念はカルヴィニズムに継承され，より積極的に展開されたのである。

カルヴィニズムの特色は，第一に世俗内の享楽を押さえて禁欲的に生きるということである。そして第二に，自己の職業において全力をあげて合理化と組織化を行うことである。ルターの掲げた「職業」観念はカルヴィニズムにおいてより一層積極的な意味を付与され，人間は「神の栄光」を増すために職業労働にさらに邁進すべきであるとされた。彼らは，自己を厳しく律し，彼らの全生活を神に捧げたと言われている。人がこのような生き方を続けたとき，基本的に富は増大していくだろう。しかし，この中にはある種の危険が含まれている。富が増大するとき現世を愛する気持ちが大きくなることは，おそらく何人にも否定できない事実であるからである。結果的には，職業倫理の根底に根ざしていた信仰が，無意識のうちに，徐々に薄れていった。職業倫理は，「神の栄光」から「富の増大」へと変化していった。そして残されたものは，職業の遂行におけるあらゆるものの合理化・組織化を全力をあげて実行するという，いわば形骸化された職業倫理であった。これは，イギリスにおいて顕著にあらわれることとなる。

歴史を眺めてみたとき，カルヴィニズムを信奉したと考えられる人々によ

って，カルヴィンの思うところと大きく異なる方向に社会は変えられていった。結果的に，彼等を通して精神世界は世俗世界と一体となる途がひらかれたのである。そして，そのような人々のエネルギーが巨大であっただけに，このことはより顕著な歴史的事実として認めることができると思われる。事実，カルヴィニズムは，活動的で急進的なひとつの力であった。それはただ単に個人を浄化しようとしただけではなくて，教会と国家とを改造し，公私を問わず，生活の全分野に宗教的な力をしみこませることによって，社会を更新しようとつとめた信条であった。そしてカルヴィニズムは国ごとに異った形をとりながらも，多くの国々に伝えられた[5]。そしてイギリスにおけるカルヴィニズムは，一般にピュリタニズムと呼ばれている。

三．イギリスの宗教改革

次に，イギリスにおける宗教改革について，簡単に眺めておくとしよう。イギリスの宗教改革の流れを極めて大雑把に述べるならば，次のようになるだろう。

- 1509　ヘンリー八世即位。
- 1527　ヘンリー八世，教皇と対立。
- 1534　首長令発布。
- 1536-39　修道院解散。
- 1547-53　エドワード六世即位。摂政サマセット公による国教会の新教化進展。
- 1549　一般祈禱書制定。統一令。
- 1553　メアリー世即位
- 1555　メアリー世，カトリックに復帰。
- 1558　エリザベス一世即位。
- 1559　エリザベス一世，（礼拝）統一令発布。国教会確立。

5）リチャード・ヘンリー・トーニー著，出口勇三・越智武臣訳，『宗教と資本主義の興隆』（上），1956年，岩波書店，170-173頁。（以下，トーニー（上）と記す。）

・1565　祭服論争

・1593　反ピュリタン勅令

まず最初に，プロテスタントとしてのイギリス国教会の成立の経緯を見ておくとしよう。社会の変化は，ヨーロッパにおいてと同様，イギリスにおいても起こっていた。農業の基礎をなす土地制度は変化し，商工業は発展していた。しかし，人々の精神生活の基盤ともいうべき宗教制度は，旧態依然であった。すなわち「農村においても都市においても，さまざまな近代的制度が中世の制度につぎ木されつつあった。ところが人間界のもう一つの重要な部門――すなわち当時人間の生活と，人間生活の紐帯のなかばを占めていた，宗教および教会に関する部門――においては，ここでもまた考え方や見解がはげしく動いていたにもかかわらず，制度上の変化は教会当局者の頑強な保守主義によってはばまれていた」[6]のである。

しかし，イギリス社会にも宗教改革は波及する。イギリスにおける宗教改革へ向けての本格的胎動は，ヘンリー八世（在位：1509-47）の時代に，政治的動機から始まった。周知のように，かつて教皇から「信仰の擁護者」と呼ばれたヘンリー八世は，自身の眼には正当派的，カトリック的な改革と見えた「英語聖書の全階層への普及，偶像崇拝や聖遺物売買のとくに露骨なものの撲滅，オクックスフォードおよびケンブリッジにおけるスコラ哲学および教会法のルネサンス学術との交替」を行って，新しい社会的，教会的秩序をつくり出そうとした。しかしそれは，「変転の時代が進むにつれて，ますますいっそう明確にプロテスタント的な原理によってしか維持し得ないものである」ことが明らかとなったのである[7]。

教皇と対立したヘンリー八世は，1534年の「首長令」によってイングランド教会をつくり，自らその首長となった。すなわち，国王を首長とするイギリス国教会（アングリカン・チャーチ）をつくったのである。そして，翌1536

6) G.M.トレヴェリアン著，藤原浩・松浦高嶺訳，『イギリス社会史』(1)，1971年，みすず書房，37頁。

7) G.M.トレヴェリアン，前掲書，88頁。

年から1539年にかけて修道院の改革を行った。さらに，エドワード六世（在位：1547-1553）の時代に，摂政であるサマセット公によって国教会の新教化が促進された[8]。その後メアリー世（在位：1553-1558）は1553年に即位後カトリックを再興し，プロテスタントを弾圧したが，それは一時的な反動であった。その後エリザベス一世（在位：1558-1603）は1559年に首長令を復活し，（礼拝）統一令によって国教の統一を行い，ここにアングリカニズムが確立した。

ヘンリー八世の行った宗教改革は，イギリス国内におる教会の支配権は手中におさめたものの，それまでに行われてきた習慣や伝統を変えるものではなかった。それは，普遍的なカトリックの社会からナショナルなものへの移行であって，多くの中世的なものが克服されることなく残ったままであった。このように，信仰の内容，教会の儀式一般，教職制度等を変えることなく，ただイギリスにある教会に対する教皇の支配権を否認して国王自身がイギリス国教会の首長となり，修道院を没収するという，外面的な政治経済的面での宗教改革であった。したがって，イギリス国教会による宗教改革を一言で表現するならば，それは「イギリスの教会に対するローマ教皇の宗教的・司法的・財政的諸関係を断ち切り，教皇の支配から教会を解放した国家の行為」[9]であり，すべてのイングランド人をメンバーとする教会の，国家による支配を目的とするものであった[10]。そしてこの性格は，その後も基本的にイギリス国教会に継承された。

8）1549年には英語の祈禱書の採用が議会で議決され，また同年の統一令によって，この祈禱書に基づいて礼拝を行うことが規定された。そのほか，様々なカトリック的な様式が廃止され，簡略な新教的儀式が採用された。また，1547年には付属礼拝堂を解体した。サマセット公の後に摂政となったノーサンバランド公も新教を押し進めた。しかし，エドワード六世時代の新教化は，いずれも政治的思惑によるものであった。（今井登志喜，『英国社会史』（上），1953年，東京大学出版界，178頁。）

9）前掲『世界大百科事典』。

10）大木英夫氏は，「改革の中心は，カトリックの普遍主義に対して，ナショナリズムの立場をとったことにある」（『ピューリタン』，1968年，中央公論社，98頁）という。

さて，イギリスのプロテスタントとしては，国教会に属する者とピュリタンがいるが，以下では主にピュリタンの活動を中心に見ておきたい。それは，ピュリタンの動きが様々な危機の克服，とくに社会変革への大きな力の一つとなったと考えられるからである[11)]。

ところで，ピュリタンをどのように定義するか。これには，相当な困難がともなう。たとえば，オックスフォード教会辞典は，ピュリタンを次のように定義している。「エリザベスの宗教政策（Elizabethan Settlement）を不満として，いわゆる非聖書的退落的諸様式から教会を，ジュネーヴのモデルに従って，一層純化せんとしたところの極端な英国のプロテスタント。彼らは決して多数を占めはしなかったが有力であり，とくに17世紀初頭の商業階級の間において影響をもっていた。彼らは公同礼拝はそのすべての点において明白な聖書的基礎づけをもつべきだとし，すべてそれに即さない諸様式は，教皇的，迷信的，偶像崇拝的，反キリスト的と信じた。(後略)」[12)]。この定義は，神学的立場からのものであると言えよう。

これに対して，神学的なものであるとともにより多く社会学的立場からピュリタンに言及しているものがある。たとえば，今関恒夫氏は，ピュリタンの定義付けに関するコリソンの見解を大略次のように要約している。①ピュリタニズムという用語はたしかに曖昧さを含むが，②同時代人にとっては「敬虔な人々」と「どっちつかずの人々」との区別は明瞭にあったのであって，③「敬虔な人々」は，多くの場合，国教会内にありながら，かれらだけの特別な人間関係を結んでいた。④「敬虔な人々」は，道徳的社会的行動と自発的信仰的訓練――それが為政者と国教会への不服従につながる場合もあった――とにおいて；その隣人たちとは異質であったが，⑤それを支えていたのは「かれらのプロテスタント的な確信の相対的激しさを越えたより根源的な何か」であった。このような意味をこめて，熱烈なプロテスタントがピュ

11) トーニーは「ピュリタニズムこそがイギリスの真の宗教改革であった」と記している。リチャード・ヘンリー・トーニー著，出口勇三・越智武臣訳，『宗教と資本主義の興隆』(下)，1956年，岩波書店，94頁。(以下，トーニー(下)と記す。)

12) 大木英夫，『ピューリタニズムの倫理思想』，56頁。

リタンと呼ばれた[13]。

本稿では，基本的に以上の二つの定義を基礎に，ピューリタニズムの普及と当時のピュリタンがどのようにして精神的不安を解消していったのかを，筆者なりに明らかにしてみたい[14]。エリザベス朝イングランドにおけるピュリタニズムは，次の三本の柱に支えられていた。すなわち，①同時代の人々が「敬虔な人々」と呼ぶ場合に念頭にあった民衆層（ピュリタン的民衆），②ピュリタン説教者，③貴族・ジェントルマンの「信奉者や同情者」，である[15]。本稿では，①のピュリタン的民衆の動きを中心に，必要な範囲で②と③について述べていくことにする。

さて，プロテスタントの一部は，メアリ一世の迫害によりスイスのカルヴィニズムが行われていた地方にのがれ，後にカルヴィニズムをイギリスに持ち込んだと言われている[16]。このルート以外にもカルヴィニズムを伝えたものが存在した[17]。そしてまた，「大学の学生やロンドンその他の貿易町に商人などが，新宗教を採り入れるようになった。とくにイギリス商人は，彼等と関係の深かったアントワープに多かった新教徒の影響を受けた。」[18]と言われている。そして，イギリスに伝えられたカルヴィニズムは，様々な迫害を受けつつも勢力を拡大し，ピュリタンと呼ばれる非国教徒の主流を形成していった。

エリザベス一世の時代になると，その宗教政策は極端に走ることを避けたものとなった。しかし，やがてエリザベス一世の反ピュリタン政策が明らか

13）今関恒夫，『ピューリタニズムと近代市民社会』，1988年，みすず書房，7頁。
14）なお，大木英夫氏は，ピュリタンのなかに長老派，独立派，バプテストを含めているが，筆者もそのように考えている。（『ピューリタニズムの倫理思想』，57頁。）
15）今関恒夫，前掲書，7頁。
16）今井登志喜，前掲書，185頁。また，約800人にのぼるピュリタンがメアリの弾圧を逃れて大陸に亡命し，他日を期していたと言われている。（倉塚平，「カルヴィニズムの成立」（岩波講座『世界歴史』，1969年，所収）437頁。）
17）たとえば，ヘンリー八世時代に大陸に亡命したピュリタンが帰国したほか，1548年5月以降，皇帝領内の情勢の悪化とともに有能な新教徒が多数渡来した。（倉塚平，前掲論文，433頁。）
18）今井登志喜，前掲書，175頁。

になり，イギリス国教会とピュリタンとの対立が徐々に鮮明になって来た。1565年の「祭服論争」がその発端である。すなわち，エリザベス一世によって，聖職者にカトリック的な祭服の着用を強制することを含めたアングリカニズムによる国民的礼拝様式の統一の強化がなされたのである。そして，この背後に教会のあり方をめぐる根本的な考え方の違いが存在していた。したがって，1570年代になるとピュリタンは，イギリス国教会と教会論をめぐって根本的に対立することとなったのである[19]。

さて，ピュリタンは，最初は上からの改革を指向していた。しかし，ピュリタンに対する弾圧のなかで，ピュリタンは中央から改革することを断念した。そして，地方の聖職者とピュリタンあるいはピュリタン的な地方の為政者によって地方における改革が目指されることとなった[20]。これが，いわゆる「クラシス運動」である[21]。国教会のなかに長老会をつくるという教会内教会としてのクラシス形成の動きは，1585年以降活発になった。1588年には，契約による独特なピューリタン集団形成の事実が確認されている。それは，国教会内部の小さな契約団体であり，信仰を日常生活に適用させていこうとする高度に倫理的な集団であった。

ある地域では，クラシスは，ピュリタンの私宅でもたれた。そして，各クラシスは，それぞれの規則を有し，名簿を備え，メンバーの拠金による基金を持っていた。そして，他のクラシスと連携を取り合った。ピュリタンは自立していると同時に，自分たちだけで親密な関係を結んでいた。ピュリタン

19) 大木英夫，『ピューリタニズムの倫理思想』，57頁。
20) 1580年には全貴族の15パーセントがピュリタン的傾向を持っていたという。(今関恒夫，前掲書，66頁。)
21) 「クラシス運動」とは，国教会の主教制度に代えて長老派的な制度を導入しようとする運動である。長老派においては，有効な教会規律は地域的な教会の牧師と俗人信徒の代表である長老の協力によってのみ確立できるものと考えられた。したがって，それぞれの地域教会は，主教によって支配されるべきものではなく，教会規律に最終的な責任を負う単位として考えられた。もちろん，長老派においても全国的な教会制度が考えられていたが，それは段階的な代議制度の積み上げによる地域的な諸教会の連合 (federation) として構想されていた。その最末端の代議機関が「クラシス」と呼ばれた。(常行敏夫，『市民革命前夜のイギリス社会』，1990年，岩波書店，206頁。)

は，教区に縛られることなく，他の教区のピュリタン牧師のいる教会に出席したり，ピュリタン牧師の秘密集会に出席したりした[22]。このようにピュリタン的民衆にとっては，教区よりも家族がピュリタン的信仰にとっての単位であった。この家族は，相互に密接な関係をもち，親類や隣人以上の相互扶助の関係を結んでいた。このように，彼等は，国教会内部にあって自発的な信仰的訓練を行っていたのである[23]。

しかし1590年から1592年にかけてのピュリタンの弾圧，そして1593年の「反ピュリタン勅令」によって，クラシス運動は息の根を止められてしまった。そして，弾圧の結果，ピュリタンの運動は基本的に政治性を除外した静かな改革運動としての説教運動として展開されることとなった。しかし，それが逆に民衆の間に浸透する結果となったのである[24]。

説教運動を述べるにあたって，中世からの慣習であった説教師と牧師の認可制度について簡単にふれておこう。エリザベス一世時代の宗教政策のなかで，1565年に，説教師に対する認可状は「政府と国教会の高位聖職者の立場からして好ましい聖職者のみ」に対して交付されることになった。そしてこれによって，多くの有能な説教師がその立場を追われることになった。ただし，聖職資格を認められ説教認可状を持ってはいたが聖職禄を与えられてはいない講師（lecturer）達がいた。彼らは，国教会の主教制度の支配に従属することが少ない，自由契約の聖職者であったため説教師の中核をなしていたが，追放を免れたのである。そこで，「ピュリタン的な説教を望む教区は講師を雇うことによって，政府と国教会の説教統制をかい潜ろうとした」のであり，このようにして「改革宗教の中核をなす説教は，絶対王政と国教会の規制にもかかわらず，正規の教会制度の外側で「講師制度」（lectureship）として定着していった」のである[25]。そして，クラシス運動が崩壊した後にピュ

22）今関恒夫，前掲書，30-33頁。
23）今関恒夫，同書，6－9頁。また，トレヴェリアンは，「英語の聖書が貧富を問わずひろく各家庭で勉強された」と記している。（前掲書，86頁。）
24）大木英夫，『ピューリタニズムの倫理思想』，61頁。
25）常行敏夫，前掲書，190-191頁。

リタニズムの中心となり，またこのことを通じてピュリタンの拡大に貢献したのが，この講師制度だったのである。

講師制度には，支配的な住民の合意によって都市などの自治体や教区の費用によって運営される「市立講師制度」あるいは「教区講師制度」と，俗人信徒の自発的な募金によって運営されるものとがあった。そして知識ある俗人信徒のイニシアティヴで運営されたが，このことは多数のピュリタン的な俗人信徒の存在を示すものである[26]。俗人信徒の自発的な募金による講師制度の場合，講師は，信徒の自発的な募金によって生活することになる。当然ながら，信徒にはそれだけの経済的余裕がなければならない。そして，それが可能であったのである。それは，商業階級やヨーマン以上の多くの人々がピュリタン信徒となっていたからである。大木英夫氏は，次のように記している。「教区が社会の中心となっているような状況の中では，信者の集りに集う者は主体的な自覚をもつ者であることは，いわば当然である。そしてそのような者は，何らかの意味で自由をもった人達である。それは知的にまた経済的に一定レベル以上の人間であることを意味する。商業階級はその意味で社会的にもっとも流動性のある階級である。外国にも行くことができる。そういう自由をもった人間，広く言えば中産階級，ヨーマン（自営農民）以上」[27]ということになる。そしてまた，「商業階級は裕福であり，このような集団における経済的支柱となる。こうしてしばしばピューリタン牧師は，国教会の聖職者よりも豊かな収入をもつほどであった。ピューリタニズムと商業階級の結びつきはこのような内容をもっていた」のである[28]。

ピュリタンの普及と浸透は，地域によって様々な様相を見せる。トレヴェリアンが言うように，イギリスには「宗教にも，思想にも，家庭の習慣にも——

26）常行敏夫，同書，192頁。
27）大木英夫，『ピューリタン』，97頁。
28）常松洋，『大衆消費社会の登場』，1997年，山川出版社，97-98頁。また，ヨーマンがピュリタニズムを受け入れやすかったのは，彼らが簡素な生活習慣になれていたからであると言われている。彼等も，ピュリタンと同様，節倹，倹約，独立などの徳目に重きを置いていた。（今関恒夫，前掲書，70頁。）

なににでも古いものと新しいものが重複してみられる。イギリス人全部が新しい暮らし方や考え方を始めるような時点は，一つとしてない」[29]のである。このように，ピュリタニズムが相当に浸透したところとそうでないところといろいろである。しかし，一般的にみて家族が経済単位であり，分割相続が一般的であるような牧畜地帯や森林地帯において強力であり，周辺の商工業の発展しつつある牧畜地帯においてピュリタニズムは最も勢力をのばしていたと言うことができるように思われる。そして，事実，ピュリタニズムが深く根を張っていたのは中産層であり，とくに都市の商工業階級であった。ピュリタニズムは交易の道筋をたどって地方に影響を及ぼしていたのであり，商業活動とピューリタニズムとの関係は当時の人々の目には自明のことであった[30]。

そして，「20数名の小さなグループを基盤としたと思われる」説教運動のなかで「ピューリタン宗教は，説教者の説く福音のメッセージの力によって，またそれを具体的生活において実践しようとする人々の間にあって，生きる宗教となった」[31]のである。説教運動の中でピューリタニズムは，このような主体的帰依者の増加とともに進展していく。こうして，宗教は客観的救済機関ではなく，主体的救済経験となる[32]。すなわち，内面的な強さをそなえた個が成立しつつあったのであり，そこには，精神的不安を前にただおびえるだけではなく，前に進もうとする人々の姿を見ることができるように思われる。まさに，ピュリタニズムが客観的かつ主体的な救済機関となったのである。

四．精神的不安の解消

以上，ピュリタニズムの浸透と普及の経緯を，簡単に見てきた。ここで，要点を整理しておこう。

29）トレヴェリアン，前掲書，4頁。
30）今関恒夫，前掲書，59，65，109頁。
31）大木英夫，『ピューリタニズムの倫理思想』，124頁。
32）大木英夫，『ピューリタン』，125頁。

① まず，ヘンリー八世にはじまる宗教改革によって，イギリス国教会が形成された。そしてローマ教皇の宗教的・司法的・財政的諸関係は，国教会が支配するところとなった。しかし，本質的な諸形態は，以前のままであった。すなわち，礼拝様式等における変化はあったものの，最も身近な宗教共同体の現実としての教区は，基本的に不変であった。

② カトリックに復帰したメアリー世のプロテスタント弾圧を逃れて，大陸に移住した人々を中心にカルヴィニズムが伝えられる。ピュリタニズムはその後の弾圧のなかで，普及・拡大していく。

③ 中産層やヨーマン，とくに都市の商工業階層を中心に，ピュリタニズムが信奉されるようになる。地方の為政者のなかにも，少なからずピュリタンが存在した。一般的にみて，ピュリタンは経済的余裕があった。

④ ピュリタンは，国教会内にあって彼等だけの特別の人間関係を結び，道徳的社会的行動と自発的信仰訓練を行っていた。

以上，当時のピュリタンの姿がかなり明らかに浮かび上がってくる。そこで次に，ピュリタンの自立と個人主義的傾向の増大を中心に，精神的不安への対応について考えてみよう。

中世のキリスト教社会は，教区に基礎を置いていた。「教区の教会は，村や小さな町に住むイングランドの男女10人中9人までにとって，社会的な中心であった」[33]と言われている。中世の人々は，様々な面で教会の保護と指導のもとにあったのである。そして，国教会による宗教改革の後も人々は様々な危険に直面しており，生活は不安に満ちていた。一方，共同体の解体によって人々の精神的不安は増大していた。しかし，国教会のもとにある教区は，そのような不安を根本的に解決してくれるものではなかった。そこで彼等が出会ったのが，カルヴィニズムであった。彼らは，当然のことながら，救済預定説を信じたのである[34]。

33) クリストファ・ヒル著，浜林正夫訳，『宗教改革から産業革命へ』，1970年，未来社，128頁。

34) クリストファ・ヒル，前掲書，129頁。なお，カルヴィンの原体験から，神は神聖なる預定を定めたとする「預定説」が生まれた。すなわち，神は「ある者は永遠

そこで，生まれてきたものが，従来の教区とは根本的に異質な組織であった。その一つが，信者の集まりであるコングリゲーションと呼ばれるものであった。教区の中の自覚的なピューリタンでもってコングリゲーションを形成する動きが生まれてきたのであるが，コングリケーションは信者の人格的集合体であって地理的区域とは考えられていなかった。そして，新約聖書に出てくる教会とは実はこのようなコングリゲーショナルな教会であって教区型の教会ではない，とされたのである。このような教会理解は，中世的教区制度を原理的に否定するものであり，それは中世社会を破壊する可能性を有していた[35]。そしてこのようなコングリゲーショナリズムは，ピューリタン運動の中に発生した必然的傾向であった。

大木英夫氏は，次のように記している。「教区が社会の中心となっているような状況の中では，信者の集りに集う者は主体的な自覚をもつ者であることは，いわば当然である。それは教区からの脱出を意味する行為をともなう。教区的人間は定住的であるが，信者の集りに集る人間は脱出的であり，地理的社会から切り離されて流動的である。そしてその地理的社会からの離脱は，中世的な教会と国家の結びつきを破ることになる。教会と国家の分離とは，教会が教区から信者の集りとなっていくことを前提にしている。このようにして新しい社会が，古い教区から引き出されていく。それは脱出と契約によってである。＜個人化＞と＜契約化＞は内的に結び合わされている。古い教区からの脱出は，人間の個的主体的な自覚なしには不可能である。契約はそのような個的主体性を確立した人格を前提とする。こうしてコングリゲーショナリズムの発生は，新約聖書に支持されながら，中世的社会有機体を克服する。教区から信者の集りへ，それが中世から近代への移行の歴史的実体である」[36]。そして，契約の思想は，前述した説教運動の中で発展してきたもの

の生命に，ある者は永遠の断罪に，あらかじめ定められている」というのである。（カルヴィン，渡辺信夫訳，『キリスト教綱要III／2』，カルヴァン著作集刊行会，1964年，新教出版社，191頁。）

35）大木英夫，『ピューリタン』，94-95頁。

36）大木英夫，同書，96-98頁。

であり，新しいエートスを形成し，根本的には人間を新しい倫理的主体として確立する必要から生まれたものである[37]。そしてピューリタンの改革運動は，個人的な生の改革から社会の基礎単位としての家庭の改革に進展した。そしてついには国家全体の改革に向かうことになるが，それは，家庭の契約化から国家の契約化，つまり契約社会化の進行であった[38]。しかし，ピューリタン説教運動は直接に政治制度の改革をめざすのではなく，人間の改革，新しい人間の形成をめざした。ピューリタン的表現を用いるならば，「リフォメーション・オヴ・ライフ」（生の改革）ということである。人間を古い生き方から新しいピューリタン的生き方へとつくり上げて行ったのである。それは教区の中に旧態依然たる意識や生活態度を守っている人間ではなく，その中から脱出して自立し，自分の信仰によって神と結びつくような人間である[39]。

ここには，主体的な個人として自立したピュリタンの形成がうかがえる。このような主体的な個人の形成こそが，精神的不安を解消するための基本的な条件であったと思われる。それでは，ピュリタンは具体的に，どのようにして不安を解消していったのであろうか。

トーニーによれば，彼等は「一切のうたがいをうちしずめて，自分こそは神に保証せられ，選ばれた器である，という自覚をもつ人にふさわしい超人的な精力でもって，実践活動のなかにとび込んでいった」という。そして，「ひとたび実業に従事すると，かれは自分の信条の特色と制約とを，仮借するところなく徹底的に，実業の世界にあてはめた」というのである[40]。そして，「はげしい個人主義もカルヴァンの教えからひきだせたし，またきびしいキリスト教的社会主義も，かれの教えからひきだそうとすればできた」のであるが，カルヴィニズムのうちで，「17世紀の英国の上層階級に迎えられた形のものにおいては，社会問題において個人主義的な考え方をおしすすめるこ

37）大木英夫，『ピューリタニズムの倫理思想』，181頁。
38）大木英夫，同書，255頁。
39）大木英夫，『ピューリタン』，102頁。
40）トーニー(下)，142頁。

とが，全体としては，支配的な考え方」であった[41]。そして個人主義は，ピュリタンにとって「いちじるしい特徴となり，また一つの政治力となることによって，世俗化するとともに，妥協の道へとすすんでいった」のである。その基調は地上に「キリストの王国」を樹立しようとすることではなく，個人の性格と行動とを完全なものにしようとしたことであり，それは公私双方の義務を規則正しく履行することによって実現せられるのであった。清教主義の理論は，以前は，規律であった。ところがその実際的な結果は自由となった」のである[42]。

このように，ピュリタンは救いの確証を信じ，厳格に自己を規律しながら禁欲的に生きた。そして，それぞれの職業において勤勉かつ合理的に労働に励んだ。このような生き方は，一般的には世俗的な富と栄誉に結びつく。そして当時のピュリタンにとって，多くの場合，それはまさに現実となったのであろう。そして，このような生き方の中で個人主義的色彩が濃厚となっていったのである。注意すべきことは，そのような変化のプロセスにおいて「決疑論」が大きく関わりを持っていたのではないかということである[43]。初期のピューリタンにおける「キリストの王国」の実現をめざして厳格に自己を律する生き方が決疑論による指導を通して徐々に緩和され，やがては職業生活における倫理性の要求という個人の道徳的生き方へと変質していったことと深い関わりがあると思われるのである。

マックス・ウェーバーは，「実践上の必要から予定説は――たとえばリチャード・バックスターにみるように――穏和なものに変化していった」[44]と，記

41) トーニー(上)，186頁。
42) トーニー(下)，148頁。
43) 「決疑論」とは，一般的道徳的原理を特殊な具体的状況（cases）に適用する技術あるいは学問である。イギリスにおけるピュリタン的決疑論は，たとえばパーキンズ，エイムズ，バクスター等による体系的なものと，幾多の大衆的なものとがあった。(今関恒夫，前掲書，113-114頁。) ピューリタンの生き方を具体的に指導した決疑論は，単に不安の解消だけではなく，不安の解消のプロセスを通じて個人主義の形成をも促進したと思われる。
44) マックス・ウェーバー著，大塚久雄訳，『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』，1991年，岩波書店，176頁。

している。ここでウェーバーの言うバクスターの決疑論は，バクスターのウースターシアの町キダーミンスターにおける牧会活動の経験と深いかかわりを持っており，具体的な牧会的実践を背景に書かれている[45]。したがって，精神的不安を抱えたピュリタンの具体的生き方を見るうえで，好個の資料といえるだろう。バクスターは，『キリスト教生活指針』[46]において，預定説からはたとえば救いに預定されていない者はどのように立派に生きても救われることはないというような無律法主義が生じる危険性があると同時に，預定説が一般信徒にとっては不安の種であり，絶望的になる者もいたと述べている。そこで，「神に従う清潔な生活が救いを確証している」という考えが展開されるのである。それでは，神に従う清潔な生活は，いかにすれば可能であるのか。神の被造物である富や名誉は，一般論としては望ましいものである。しかし，他方，これらはあらゆる悪の根源でもあり，最も手強い誘惑ともなる。そこで，誘惑に陥ることなしに，富を取得し使用することができる主体の確立が勧告される。こうした主体の確立は，世俗内禁欲，すなわち「神への奉仕」と「天職における義務の遂行」によって達成されるというのである[47]。

ところで，「当時のピュリタンの教説に従えば，calling は神への直接的な務めとしての「一般召命」(general calling) と，世俗的な職務・職業としての「特殊召命」(particular calling) とに区別され，両者ともが神の召命であり，従って，教会と並んで世俗的職業も人間が神の召命に応えるべき場と考えられていた」[48]。しかしながら，「特殊召命」は次第に神への信仰と富への礼拝

45) 今関恒夫，前掲書，250頁。
46) トーニーは，同書について，ピュリタンの『神学大全』であるとともに『道徳大全』でもあった『キリスト教指針』の目的は，権威によって威圧することではなくて，読者たるキリスト教徒の明るい常識にうったえて確信を与えることであった。そしてそれは，信仰上の実際的な問題を解決し，神学上の知識を真面目なキリスト教徒としての実践にうつすために書かれており，詳細かつ的確な規範を有していた。したがって，種々な生活環境にある人々に対して実践的な指導を与えるに十分であった，と記している。(トーニー(下)，126頁以下。)
47) 今関恒夫，前掲書，252頁以下。
48) 今関恒夫，「ピューリタニズムの「市民社会」論」(『三田学会雑誌』75巻4号，所

を結び付ける中心となる。たとえばエイムズ（W. Ames）の『良心論』においては，職業労働における禁欲的姿勢として，職業上の技能，仕事への集中，勤勉，好機を逃さずそれをうまく捉えて正しく利用する知恵，困難を克服する勇気と持続性，営利と成功についての節度，労働の宗教的聖化等が要求されるのであるが，このような徳行は徳性にまで深化される必要があった[49]。そして，救済としての確証は，徳性として形成された善行（calling の遂行）によるというのである。そして，17世紀末には calling という概念はすでに陳腐なものとなっていた。職業において神に仕えるという宗教的義務は，職業生活における単なる倫理性の要求（勤勉・節制・周到・慎重などの徳目の追求）へと変質を遂げていったのである[50]。

以上見てきたように，初期のピュリタンは救いの確証を求めて真剣に生きたと考えられる。そして，これによって不安を解消した者も少なくなかっただろう。しかし，その後のピュリタンの生き方の具体的な指針となった決疑論においては，実践上の必要から預定説は穏和なものとなっていった。そして救いの確証が天職における義務の遂行とされ，さらに義務の遂行が職業生活における倫理性の要求へと変質したとき，そして職業労働における成功と世俗的な繁栄が救いの確証と見られるようになったとき，彼等の不安はおそらく大幅に解消されただろう。そしてそれは，個人主義的方向への傾斜と軌を一にしていったものと思われる。ピュリタンにとって精神的不安の解消は，このような社会の変化と深く関連していたのであり，このような生き方を実践していくなかで，ピュリタンは精神的不安を解消していったのである。そして，ピュリタンは決して多数ではなかったが，社会全体に大きな影響を及ぼしたことを考慮した場合，このような生き方がひろく精神的不安の解消に与えた影響は大きかったと言うことができると思われるのである。

収）142頁。

49）今関恒夫，同論文，143頁。

50）今関恒夫，前掲書，116頁。

五．む　す　び——今後の課題——

ここでは，今後の課題として，次の二つの問題をあげておきたい。一つは，精神的不安の解消そのものについてである。これまで見てきたように，中世末期頃から近代初期において一般的であった精神的不安は，「一応」の解消をみた。それでは，このリスクは本当に解消されたのであろうか。たしかに，ピューリタンの確信に満ちた生き方からは，精神的不安を感じることはかなり困難である。しかし，筆者は，彼らの生き方に根本的な問題を感じることを否定できない。それは，前述したように，彼らの確信的な生き方の根底に「決疑論」による緩和と個人主義的思考に基づく個々人の道徳的生き方が深く結びついていると思われるからである。筆者は，個人主義的生き方を否定するものではない。しかし，「過度の個人主義的生き方」がその後の歴史においてきわめて大きな問題を醸成してきたこと，そして，まさにそれが現在の社会の大きな問題点の根本にあるのではないかと考えられるからである。したがって，中世末期から近代初期に誕生し，その後力強く成長してきた個人主義的生き方，とくに経済的個人主義についての解明が，一つの重要な課題である。

そして第二の課題は，本稿が対象とした時期は，同時にきわめて大きな物質的不安を抱えていた時代でもあったということに関連している。当時のヨーロッパ社会は，慢性的な貧困問題への対処を迫られていた。そしてこの時期に生じた食糧危機は，共同体の解体と相まって深刻な社会問題を惹起したのである。このような物質的不安は，本稿が対象とした精神的不安とも大きな関連持っていることは，明らかである。したがって，当時の物質的不安と貧困問題への対処を解明することは，第二の課題である。

以上のような，大きな課題をおぼえつつ，とりあえず本稿を閉じることとする。

（たけだ・ひさよし／経営学部教授／2001年11月15日受理）

A Study of Mental Risks in Early Modern England

Hisayoshi TAKEDA

In early modern England, society were in the big change and the people were suffered from various risks. Main risks of these ages were mental risks and physical risks. Mental risks had relation to that whether they can get salvation after their death, and physical risks were derived from some reasons such as shortness of foods. This article is a study of mental risks of these ages.

The communal society, which had been very natural in medieval England and had a great function to solve the people from risks, were declined through "Religious Reformation" and other socio-economic upheaval. And mental risks were enlarged through disappearance of "corps Christianum", which had been the backborn of the communal society.

By the way, Calvinism, which had emerged through Religious Reformation, were introduced into England and the calvinists in England were called the Puritans. And most of the Puritans, who were in the belief of "Programme of God", practiced asceticism in their lives, and they worked hard in a rational manner. In common, these style of living lead them success in secular matters. Most puritans were in the deep belief that their success in secular matters must be the "blessing of God", and they lived individually and independently. As this, most of the puritans has conquerred the mental risks through their hard work and has succeeded in the secular matters.